

【奨励賞】

団体名	食社北杜
活動の内容（概要）	北杜市の山々で育まれた豊かな水や自然環境がもたらす「食と農」を活用し、地域の中小企業者と次世代を担う地元高校生が連携し、ビジネスにつなげることを通じて、地域の稼ぐ力を醸成することを目的とした、新商品開発プロジェクトです。このプロジェクトは、若者が地域の素晴らしさを理解することにより、SDGs11 番目の開発目標である「住み続けられるまちづくり」を視野に入れて推進する取り組みです。

受賞理由

- 「地域の稼ぐ力」というテーマがリアルであり、そのために地域中小企業の本気での巻き込みに成功している。講義・ワークショップ・実習などが稼ぐというテーマで有機的に結びついており、地域での就職にも繋がりがやすい。
- 総合情報ビジネス系列の生徒ならではの質の高い商品開発やネットショップ開設など、「本物」体験が充実している。学校と地域が目標を合致させ、開発から販路の創出までを市や地元の事業者等がバックアップしており、それぞれが当事者として取り組む姿が素晴らしい。普通科等、他の学科への波及も進んでいるので、「食社北杜」の取組と総合的な探究の時間等のカリキュラムの関連などが整理され、キャリア形成への効果検証がなされると、社会に開かれた教育課程のモデル的な取組となっていくと期待できる。
- 「次世代を担う高校生」×「地元事業者」×「地域資源」を掲げ、生徒に育みたい資質能力を明確にし、社会人基礎力をワークシート形式ではかり、エビデンスに基づき検証しながら事業をすすめていることは素晴らしい。高校生のキャリア教育のために、行政・企業の強みを発揮しそれぞれの役割を果たすだけでなく、財政面でのサポートがあり持続可能性を高めている。「貸し借り」の関係ではなく、産官学が共に地域の課題を解決する当事者となり、そこに高校生のリアルで深い学びがあり、地域で活躍する人材を育て、まちづくりへつなげている好事例である。
- 完成度の高いキャリア教育の実践である。地元資源を生かし、学校、市役所、地元事業者の協働が信頼関係 win-win の関係となっているところが成功していると考えられる。「住み続けられるまちづくり」に稼ぐ力の醸成を入れたところが継続にもつながっているのではないかと。4年目にして新聞記事などから10代の意見として①地域のすばらしさを再認識②北杜市への郷土愛の醸成の効果が見て取れる。
- 他校への普及など今後が楽しみな事例である。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

山梨県立北杜高等学校

【行政や地域・社会，産業界等】

独立行政法人中小企業基盤整備機構関東本部/北杜市役所商工食農課/山梨大学/小淵沢総合研究所有限会社オープンフィールド/米粉 plus./有限会社農業法人清里ジャム/Bench/萌木の村 ROCK/ソーセージの店フランク/中村農場/ハケ岳パイ工房/ハーベストテラスハケ岳/あけの農さん物直売所レストラン/金精軒製菓株式会社/手づくり和・洋菓子秋月/白州屋まめ吉株式会社/久月堂/有限会社久保酒店/有限会社横内製麺

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成30年～ 【継続年数】4年

本校は、北杜市役所と包括連携協定を結んでおり、現在商工食農課とSDGs 開発目標に基づいた「山梨県北杜市における『食と農』を活かした住み続けられるまちづくり推進プロジェクト」の中で「食杜北杜」の地域ブランド展開を行なっている。これまで、地元の事業者の協力を得て商品を完成・販売し、地域と連携したキャリア教育を実践している。

「協力性」についての具体的な取組，工夫している点など

「次世代を担う高校生」×「地元事業者」×「地域資源」を掛け合わせ、「山梨県北杜市における『食と農』を活かした住み続けられるまちづくり」達成を目指し北杜市役所・地元事業者・北杜高校の三者で地元の魅力を発信するための商品開発ワークショップを行っている。毎年度取り組みを始める際に、北杜市役所・地元事業者・北杜高校に加え全体へアドバイスをいただいているコーディネーターの支援を受け、運営会議を開催している。また、年度内に約10回のワークショップ・販売実



<ワークショップ風景>

習の機会を設定し、商品を開発するために必要な知識や技術を、実際にビジネス活動を行っている事業者を通じて経験する学習は非常に効果的であり、高校生が自分たちで開発した商品を各種販売実習を通じて、授業で学んだ基礎・基本的な知識・技術を実践できる貴重な機会である。

この活動を通じて、次世代の若者に対しては①地域の素晴らしさを再認識②北杜市への郷土愛の醸成③定住及びUターンの増加④地域課題解決型キャリア教育の推進⑤進路の選択肢の増加、地元事業者に対しては①多角的な意見を取り入れた新たな商品開発②域内外で稼ぐ力の醸成③次世代の若者への情報発信④域外へ魅力発信、北杜市の交流人口の増加、などの効果が期待できる。

「継続性」についての具体的な取組，工夫している点など

年度初めに北杜市役所・地元事業者・北杜高校の三者代表者で運営委員会を開催し、年間のスケジュールを立てている。また、年内に約10回実施するワークショップの前後において打ち合わせ、振り返りを行い、生徒（研究日誌や感想文作成）・事業者（ワークショップまとめシート）・運営者（各グループファシリテータからの振り返り）のフィードバックを行い次回のワークショップに繋げている。年度末にも総括を行っている。さらに、北杜市役所・地元事業者・北杜高校の三者それぞれに主担当者を配置しているが、人事異動などもあるためそれぞれに副担当も配置し、情報の共有化がなされている。

総合情報ビジネス系列の2年生が商品開発ワークショップを体験している。このワークショップを体験し、開発した商品については3年次に自分たちが開発した商品を事業者店舗などで販売する実習

やインターネット上でショップページを開設し販売するなど継続的にビジネスについて学習ができるように協力していただいている。

北杜市役所商工食農課では、「食杜北杜」事業に対して予算を組んでいただいている。また、協力事業者についてはワークショップ実施運営に関わる費用（商品開発費）を事業者負担としていただいている。学校としての金銭的な負担はなく、運営実施場所の提供という形をとっている。三者それぞれができることを共通理解として負担している。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

「自己実現を目指す」という北杜高校の教育目標達成と地域が抱える「若者の地元離れ」を解決するための方法としてのこの取り組みが下支えとなっている。グループに分かれたワークショップは、SDGs を意識し生徒・事業者・ファシリテーター（市役所職員、教員）で構成されており、男女・年齢差等を加味した多様な集団となっている。グループワークでは、各自の意見を付箋に書き模造紙にまとめ全体に発表をし、班長・副班長を中心として互いに意見を出し合う工夫をしている。（人間関係形成・社会形成能力）、北杜市の魅力である農産物を使用した商品開発を通じて、地域の事業者と連携することで、身近な産業・職業の先輩たちと学校では学ぶことができない情報を収集し活用することができている。また、職場実習は生徒自身の働くことへの職業理解の機会となっている。（情報活用能力）。学校で学習してきた基礎・基本的な知識を基に、計画的に商品を開発し販売するためには、どのような役割があるかを理解し、そのグループの中で、自分自身が将来の社会生活についてどのように活用できるかを体験的にやりがいをもって学習している。（将来設計能力）。ワークショップ内のグループワークにおいて様々な意見を自分自身の意見と比較検討することで、何ができて何ができないのか、商品開発の課題解決に最も必要な情報を選択し、決定する力を身に付けている。（意思決定能力）



<事業所実習風景>

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

事業初年度の平成 30 年度は協力事業者 10 者（開発商品 15 品）であった。その後令和元年度（平成 31 年度）では 8 者（開発商品 16 品）、令和 2 年度 9 者（開発商品 26 品）、令和 3 年度 5 者となり、延べ 32 者の協力を得ている。このように継続的に実施することができているのは、商品開発して終わりの取り組みではなく、継続的に販売する機会まで市役所を中心として販路を創出している点大きい。また、新聞・テレビなどのメディアにも取り上げられることでより多くの魅力が発信されている。北杜高校においては、食杜北杜を体験したいという希望をもって入学してくる生徒も出ている。また、協力事業者においては、開発した商品と既存商品を市役所が主催する催事において県内外で販売する機会を設けることができ販路の拡大ができている。高校生の若者の意見を取り入れることで魅力的な商品を開発できるだけでなく、地元の企業の良さも伝えることができると考えてくれている。市役所においても地元の高校生には、北杜市の魅力に気づき将来地元に戻ってくるなどの機会としてもらい、事業者には地域の稼ぐ力の醸成向上を担っている。

活動を続けていく中で、多くの機関から取組の発表の機会をいただくことができた。毎年度の生徒たちの取組んだ成果が三者間で終わることなく外に向けて発表することにより客観的に振り返る機会となり、社会に出たときの貴重な体験となっている。

学校現場の評価・感想・コメント

平成30年度から取り組みを始めた「山梨県北杜市における『食と農』を活かした住み続けられるまちづくり推進プロジェクト」は、4年目となり県内はもとより、全国的にも特徴のあるものとなっている。本校の総合学科では生物資源系列は、学校の農場を利用し農業実践ができる。環境工学系列では、敷地を利用した測量・土地改良などの実践ができる。福祉ライフデザイン系列では、介護福祉の道具を使い実践ができる。しかし、総合情報ビジネス系列では、商業を継続的な学びとしての実践が不足していた。その中で、商品開発を行い販売までを一貫して学習することができる実践は、本校の魅力の一つとなっている。

また、この三者間での取り組みが4年目を迎えていることは、互いが「貸し借り」の関係ではなく、お互いが地域の課題を解決するための当事者となり、共通の目標を目指し取組んでいることの成果である。今後も、双方向性と多様性を活かし、熟議・協働・マネジメントを意識した学習環境を構築していきたい。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

北杜市役所担当者：この食杜北杜の取り組みは、地元の魅力を再発見し将来地元に戻ってくる機会や県外に出ていったとしても北杜市のファンとして県外の人たちに魅力を伝えることができる人材となっている。

連携事業者：地元の企業として、地元の高校生とこのような取り組みを実施できることは生徒たちにとって非常に素晴らしい授業だと思う。商品が消費者の手元に届くまでにどれだけの人が関わり、モノづくりにかける思いも理解してくれるのはありがたい。それ以上に私たち企業も若い世代の価値観や考え方を一緒に学べる非常に良い機会でした。

山梨大学特任教授（メインファシリテーター）：高校の授業では学習することが難しい内容を市役所、地元事業者の協力で実施し、かつ4年目を迎えていることは非常に素晴らしい事だと思う。今後この取り組みを学んだ生徒たちが社会に出て課題を解決する手段や手法を様々な人たちと学習できたことは実学として身につけている。今後の活躍に期待したい。